

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530156

研究課題名(和文)日本のテレビ討論番組の特徴と性質に関する研究：政治的レトリックと行動への考察

研究課題名(英文)Research on the Characteristics and Nature of Japan's Televised Debate Programs: An Inquiry on Political Rhetoric and Involvement

研究代表者

FELDMAN Ofer (Feldman, Ofer)

同志社大学・政策学部・教授

研究者番号：50208906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：調査・分析の結果、明らかとなった大きな点は、(1)大臣以上の役職に付く与党議員は、野党議員や首長(地方レベル政治家)、非政治家よりも明確に答えていないこと、(2)明確に答えられない争点として、経済・エネルギーの分野であること、(3)大臣以上の役職と争点の交互作用によりどっちつかずが発生すること等が現時点において明らかとなっている。インタビューでの質問によって生み出されるどっちつかずの回答は、質問の内容だけではなく、政治システムにおけるインタビューされる方(政治家、非政治家など)の役割や立場における責任にも関係があると明らかになりました。

研究成果の概要(英文)：Results of this research indicate that during televised political interviews in Japan (1) members of the national Diet (including members of the coalition and opposition camps, and members of the Cabinet) tend to equivocate more often than non-politicians in the replies they provide to questions; (2) Politicians tend to provide less explicit and less clear replies when they are asked in particular regarding controversial issues, most notably the economy and nuclear power-related questions; (3) Politicians who have higher level of responsibility in the administration (i.e., vice ministers, ministers, and prime ministers) tend to equivocate more often and in regard to a larger number of issues than any other group of politicians or non-politicians. The attitude toward equivocation in replying to interview questions is thus related not only to the issue politicians (and non-politicians) are asked about, but also to their position and level of responsibility within the political system.

研究分野：政治心理学

キーワード：日本政治 国会議員 テレビインタビュー どっちつかず理論 政治的コミュニケーション マスコミ効果

1. 研究開始当初の背景

政治討論番組で行われるインタビューは、キャスターが国会議員、首長、専門家、元官僚など政策決定過程に携わる重要なアクターに対して質問を行うものである。テレビの政治インタビューであるため、生放送が中心となっており、多くの視聴者が背後に存在する。

そのため、キャスターは視聴者の期待に応えるために、鋭い質問をして国民に代わり質問を行う。他方で、回答を行う出演者(政策決定過程の重要なアクター)は、無責任なことを発言しないように慎重に回答することを心がける。

回答者の慎重な姿勢は、質問に対して明確に答えないという、どっちつかず理論(Theory of Equivocation)として説明される。政治コミュニケーション論において、どっちつかず理論に関する先行研究の多くが、少数のケーススタディにより説明されており、大規模サンプルによる定量的な研究はされていない。

また、どっちつかずな回答が発生するのは、キャスターの質問の形式やフェイス(名誉・威信)に対する脅威の結果であると考えられ、質問と回答の相互作用を明らかにする必要がある。

さらに本研究では、どっちつかずが発生する状況は、日本独自の文化に由来するのか、あるいは他国と比較して同等程度であり、全世界共通の事項として起こっているのかを明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の政治インタビューにおけるどっちつかず理論のモデルを構築すること、いかなる質問の形式がフェイスに対する脅威を起こしているか特定すること、上記を踏まえて、日本の政治インタビューが有する性質と特徴を明らかにすることにある。

どっちつかず理論は、インタビューを行う状況によって生じることが指摘されており、この先行研究に対して、回答者の属性、質問の形式によってどっちつかずが生じることの精緻化を試みる。

また、フェイスへの脅威は政治家個人のフェイス、政党のフェイス、重要な他者(組織、有権者)を守るためのフェイスに分けられているが、質的に分類するよりも、6点のリッカート尺度により段階的に捉える方が適切であると考える。そこで、質問の形式とフ

ェイスへの脅威の関係を整理する。

これらを踏まえ、日本の政治インタビューが日本文化を表しており、協動的な関係に留まるのか、テレビのキャスターとして厳しい質問を多く行い、イギリス等と同様の質問の文化が存在しているのかを検証する。

3. 研究の方法

2012年5月1日から2013年6月30日まで14ヶ月の政治インタビュー番組を録画し、データ収集を行った。当初12ヶ月間のデータ収集を予定していたが、2012年12月に衆議院総選挙が実施され、政権交代が起こったため、民主党政権のサンプルとバランスを取るため、2ヶ月間データ収集期間を延ばすこととした。

分析対象としたテレビ政治討論番組は、フジテレビ「新報道2001」、BS朝日「激論クロスファイア」、フジテレビグループ「プライムニュース」である。

録画した番組のテープ起こしを行った上で、全ての「質問」と「回答」を区別し、それぞれについて独自のコーディングシートを作成し、それぞれ「質問」と「回答」を測ることとした。分析対象としたインタビューの数は194人であり、5048問の質問と回答を得た。

独自のコーディングシートは「質問」と「回答」に分けられ、質問の方は、質問形式として(1)「前書きされた質問」と(2)疑問、平叙、命令、定形動詞に欠けているなど、いわゆる「前書きされていない質問」に分類される。

例えば、「前書きされた質問」では、特に物事に対する意見や考え方についての質問や、聞かれた物事について答えてからさらに追及する質問であり、「前書きされていない質問」は、YESかNO及び5W1H、WとHで始まる6つの疑問詞(誰が・何を・いつ・どこで・どうして・どのように)に分類される。

回答のコーディングシートは、(1)自分の意見を述べているかという送り手、(2)インタビューアーに向けられているかという受け手、(3)回答の内容が理解し、分かりやすいかどうかの内容、(4)質問に対して明確に答えているかどうかの脈絡で構成される。

さらに明確に答えていない場合のサブカテゴリーも設問として加えている。

4. 研究成果

調査・分析の結果、明らかとなった大きな点は、(1)大臣以上の役職に付く与党議員は、野党議員や首長(地方レベル政治家)、非政治家よりも明確に答えていないこと、(2)明確に答えられない争点として、経済・エネルギーの分野であること、(3)大臣以上の役職と争点の相互作用によりどっちつかずが発生すること等が現時点において明らかとなっている。

これは、政府の役職に就く政治家の方が、政府の役職に就いていない与党議員より責任が重く、フェイスへの脅威が大きいことを意味している。

また、経済分野に関する争点については、アベノミクスに関する財政政策、金融政策、成長戦略に関する質問が多くなされており、マスメディアが批判的に質問したことが答え難くなっていた要因であると考えられる。

さらにエネルギーに関しては、2011年の震災以降、電力供給が逼迫したことから原子力エネルギーに関する問題が大きく取り上げられ、当事の民主党政権において、厳しい質問がされたことから、答えにくい争点となったものと考えられる。

こうした実証研究を通して、どっちつかず理論を精緻化しており、質問によって答えない争点が明らかになることで、民主主義が深化すると考えられる。

これら調査・研究の結果の成果は一部公表が始まっているが、今後さらなる成果の公表を行う予定である。とくに、質問形式とフェイスへの脅威の関係、また質問と回答の相互作用に関する関係を整理し、モデルの精緻化を図っていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Feldman, O., Kinoshita, K. & Bull, P. (2015). "Culture or Communicative Conflict? The Analysis of Equivocation in Broadcast Japanese Political Interviews" *Journal of Language and Social Psychology*, 34, 65-89.
「査読有」

〔学会発表〕(計 3 件)

Feldman, O., Kinoshita, K. & Bull, P. (2014). "Political Interviews on Japanese Television: A Study of Communicative Conflicts and Defending the Face," *Asia Network for Public Opinion Research 2014 Annual Conference*, November 30, 2014, Toki Messe, Niigata, Japan.

Feldman, O. & Kinoshita, K. (2014). "Political Interviews in Japanese Television: A Study on Rhetoric and Equivocation," 23rd World Congress of International Political Science Association, July 22, 2014, Palais des Congrès, Montreal, Canada.

Feldman, O. & Kinoshita K. (2014). "Televised Political Interviews in Japan: Straight Replies, Honest Replies, and the Rest," 37th Annual Meeting of the International Society of Political Psychology, July 6, 2014, Ergife Palace Hotel, Rome, Italy.

〔図書〕(計 2 件)

Feldman, O. *Televised Democracy?: How Politicians Handle Questions during Broadcast Talks Shows*. In S. Ben-Rafael Galanti, N. Otmazgin, & A. Levkowitz (eds) *Japan's Multilayered Democracy*, Lexington Press, Lanham, 2015, pp. 175-196.

フェルドマン・オフエル (2014). 政治的インタビューは機能しているかー日本のテレビ討論番組を考えようー同志社大学政策学部10周年記念出版編集委員会(編)民主主義再生のため
にすべきこと、学芸出版、32-42頁。

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

FELDMAN, Ofer

同志社大学・政策学部・教授

研究者番号：5028906

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：